

意見交換会開催結果概要

- 1 開催日時 平成29年 2月21日（火）
- 2 時 間 開会 午後7時～ 閉会 午後8時45分
- 3 場 所 金沢卯辰山工芸工房 市民工房棟市民工房教室
- 4 参加人数 28名
- 5 出席議員 福田太郎議長、高岩勝人副議長、
喜多浩一文教消防常任委員長、
小間井大祐文教消防常任副委員長、
前 誠一文教消防常任委員、野本正文教消防常任委員、
小林 誠文教消防常任委員、秋島 太文教消防常任委員、
中西利雄文教消防常任委員、
高 誠総務常任委員長、
長坂星児経済環境常任委員長、
源野和清市民福祉常任委員長、
麦田 徹建設企業常任委員長、
清水邦彦議会運営委員長
（オブザーバー議員）
上田雅大議員、中川俊一議員、坂本泰広議員、
松井 隆議員、大桑初枝議員、広田美代議員、
小阪栄進議員、下沢広伸議員、久保洋子議員、
黒沢和規議員、山本由起子議員、森 一敏議員、
角野恵美子議員、森尾嘉昭議員
- 6 次 第 別紙のとおり
- 7 結果概要 以下のとおり

小間井大祐文教消防常任副委員長の進行のもと、福田太郎議長の開会挨拶に引き続き、出席議員及び専門家の紹介を行った。次に、前誠一文教消防常任委員から平成28年度金沢市議会12月定例会議会及び平成28年度金沢市議会1月緊急議会報告を行った。その後、喜多浩一文教消防常任委員長に進行をかわり、秋島太文教消防常任委員から意見交換会テーマ説明として「金沢の文化の人づくりについて」の説明を行った後、テーマに関して専門家の意見発表を行い、次に市民とテーマに関する意見交換を行った。小間井大祐文教消防常任副委員長の進行に戻り、高岩勝人副議長の閉会挨拶で閉会した。

1. 開 会

【小間井大祐文教消防常任副委員長】

定刻となりましたので、ただいまより金沢市議会意見交換会を開催いたします。

本日の司会進行を務めさせていただきます文教消防常任委員会の副委員長の小間井大祐でございます。どうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

開会に当たりまして、金沢市議会、福田太郎議長から皆様方に御挨拶を申し上げます。よろしくお願いいたします。

【福田太郎議長】

皆さん、こんばんは。今日は金沢市議会の意見交換会によろこそおいでくださいました。まことにありがとうございます。また、きょうは4人の専門家の方々にも来ていただきまして、まことに寒い中、ありがとうございます。

金沢市においては、もう皆さん御存じのとおり、文化が息づくまち、藩制時代から続くまちであります。これからどうしていけばよいのかという問題もありますし、議会といたしましても文化、それから伝統についてもしっかりと担っていきたいと思っています。

また、3月定例会議会に、金沢卯辰山工芸工房リニューアルの予算が計上されるとお聞きしておりますが、それについてもここで勉強して、来月開かれる議会に対してしっかりとやっていきたく思いますので、よろしくお願いいたします。（拍手）

【小間井大祐文教消防常任副委員長】

ありがとうございました。

2. 出席者の紹介

【小間井大祐文教消防常任副委員長】

ここで、今回出席している議員を紹介いたします。

まず、ただいま御挨拶をいただきました福田太郎議長でございます。

【福田太郎議長】

改めまして、こんばんは。

【小間井大祐文教消防常任副委員長】

高岩勝人副議長でございます。

【高岩勝人副議長】

こんばんは。きょうはよろしく申し上げます。

【小間井大祐文教消防常任副委員長】

次に、今回の意見交換会を担当している文教消防常任委員会の委員を紹介いたします。

喜多浩一委員長。

【喜多浩一文教消防常任委員長】

こんばんは。よろしく申し上げます。

【小間井大祐文教消防常任副委員長】

中西利雄委員。

【中西利雄文教消防常任委員】

こんばんは。よろしく申し上げます。

【小間井大祐文教消防常任副委員長】

野本正人委員。

【野本正人文教消防常任委員】

こんばんは。よろしくお願いたします。

【小間井大祐文教消防常任副委員長】

秋島太委員。

【秋島太文教消防常任委員】

こんばんは。よろしく申し上げます。

【小間井大祐文教消防常任副委員長】

小林誠委員。

【小林誠文教消防常任委員】

こんばんは。よろしく申し上げます。

【小間井大祐文教消防常任副委員長】

前誠一委員。

【前誠一文教消防常任委員】

こんばんは。よろしくお願いたします。

【小間井大祐文教消防常任副委員長】

そして、福田太郎議長も文教消防常任委員会の委員です。

また、文教消防常任委員会のほか4つの常任委員会と議会運営委員会の各委員会の委員長も出席しておりますので、紹介させていただきます。

まずは、総務常任委員長、高誠議員です。

【高誠総務常任委員長】

こんばんは。よろしく申し上げます。

【小間井大祐文教消防常任副委員長】

経済環境常任委員長、長坂星児議員です。

【長坂星児経済環境常任委員長】

こんばんは。

【小間井大祐文教消防常任副委員長】

市民福祉常任委員長、源野和清議員です。

【源野和清市民福祉常任委員長】

こんばんは。よろしくお願ひします。

【小間井大祐文教消防常任副委員長】

建設企業常任委員長、麦田徹議員です。

【麦田徹建設企業常任委員長】

こんばんは。よろしくお願ひします。

【小間井大祐文教消防常任副委員長】

議会運営委員長、清水邦彦議員です。

【清水邦彦議会運営委員長】

こんばんは。よろしくお願ひします。

【小間井大祐文教消防常任副委員長】

また、今ほど御紹介しました文教消防常任委員会の委員及び各委員長以外の市議会議員につきましては、オブザーバーとして参加しておりますことを御報告させていただきます。

次に、テーマである「金沢の文化の人づくり」について意見交換会のために4名の専門家の方々にお忙しい中お越しをいただいておりますので、御紹介をさせていただきます。金沢卯辰山工芸工房館長の川本敦久様です。

【川本敦久金沢卯辰山工芸工房館長】

川本です。

【小間井大祐文教消防常任副委員長】

北山堂代表取締役、高橋洋一朗様です。

【高橋洋一朗北山堂代表取締役】

こんばんは。よろしくお願ひします。

【小間井大祐文教消防常任副委員長】

金作家、秋友美穂様です。

【秋友美穂金作家】

こんばんは。よろしくお願ひします。

【小間井大祐文教消防常任副委員長】

工芸作家、柳井友一様です。

【柳井友一工芸作家】

こんばんは。よろしくお願ひします。

【小間井大祐文教消防常任副委員長】

本日は遅い時間にもかかわらずお集まりいただき、まことにありがとうございます。なお、本日はもう一人、乙女の金沢プロデューサーの岩本歩弓様をお呼びする予定でしたが、体調不良のためにあいにく御欠席となられましたことをお伝えいたします。

次に、本日の意見交換会について簡単に御説明いたします。

この意見交換は金沢市議会が主催するものであり、金沢市が行っている、あるいはこれから行う事業の説明をしたり解説をする場ではないことをあらかじめ御承知ください。

きょう御参加されている市民の代表として議会に出ている議員と専門家や市民の皆様との意見交換会を通じ、金沢市への要望や意見を届けようとするものです。平成26年度から実施しているものであり、回ごとにテーマを設けて実施しております。今回は「金沢の文化の人づくりについて」をテーマに意見交換を行います。

それでは、受付で配付いたしました資料のうち、意見交換会という表題の資料をごらんください。

この後は、まずは議会報告といたしまして、先般終了しました12月定例月議会と1月緊急議会の概要について5分程度説明させていただきます。その後、本日のテーマについて七、八分御説明し、きょうお越しいただいております専門家の方から御意見をいただき、それを踏まえて意見交換を行いたいと考えております。

3. 議会からの報告

- ・平成28年度金沢市議会12月定例月議会報告
- ・平成28年度金沢市議会1月緊急議会報告

【小間井大祐文教消防常任副委員長】

それでは、平成28年度金沢市議会12月定例月議会と平成28年度金沢市議会1月緊急議会につきまして報告いたします。

[前誠一文教消防常任委員が平成28年度金沢市議会12月定例月議会及び平成28年度金沢市議会1月緊急議会報告について別紙のとおり説明]

4. テーマ（金沢の文化の人づくりについて）に関する意見交換

- ・テーマについての説明

【小間井大祐文教消防常任副委員長】

続きまして、本日のテーマに移ります。ここからの進行は、喜多文教消防常任委員長が行います。

【喜多浩一文教消防常任委員長】

それでは、テーマに関する意見交換の進行を務めさせていただきます文教消防

常任委員長の喜多浩一でございます。改めてよろしくお願ひいたします。

それでは、座って説明させていただきます。

今から御説明します資料は、きょうの意見交換会を開催するに当たりまして、皆さんと意識や情報の共有を図ることを目的に、現在、議会として把握している情報をもとに作成しました。なお、スライドの資料は、お手元に配付しておりますので、見づらい場合はお手元の資料を見ながらお聞きください。それでは、説明のほうを文教消防常任委員会の秋島太委員が行います。

[秋島太文教消防常任委員がテーマについて別紙のとおり説明]

・テーマに対する専門家の意見発表

【喜多浩一文教消防常任委員長】

それではここで、専門家の方々からテーマに対する御意見を順にお聞きしていきたいと思ひます。10分前後でお願いしたいと思ひます。それでは、金沢卯辰山工芸工房館長の川本様、よろしくお願ひいたします。

【川本敦久金沢卯辰山工芸工房館長】

先ほど紹介にあずかりました川本です。よろしくお願ひいたします。

金沢のこの文化の政策のことについては、よその都市と比べても圧倒的に力の入れ方はすごいと思ひますし、よその都市へ行って卯辰山工芸工房のことを初め金沢のまちづくりの話をする、我々の都市ではとてもそういうことはできない、金沢だからできる話だなという御意見をよくお聞きすることがあるわけですが、金沢がそのように今日、そういう文化というものを一つの根底にして人づくり並びにまちづくりをしているというそのことのスタートは、先ほど趣旨のところでお話もございましたように、400年以上前のいわゆる前田藩の一つの政策——当時はそれが文化政策とかそういうことじゃなかったと思ひますけれども、その政策が今日に受け継がれてきた中で一つの文化というものが醸造されていったかなというふうに思っております。

文化というものの言葉というのは英語ではcultureと呼んでいますが、辞書等を調べてみると文化というのは学問とか芸術とか宗教とか道徳、主として精神的活動から生み出されたものというふうに書かれております。私は工芸工房の工芸のほうに關与しておりますので、その芸術の中の工芸というものを一つの切り口にして、金沢のそういう歴史的事実から今日に金沢がそういうふうな文化性というものを築いてきたという、それをちょっとたどってみたいというふうに思っております。

文化というものを形成していくためにはまず何が必要だったかという、加賀藩の政策を見てみますと、まず加賀藩が、でき上がった城下町をいかに成立させていくかという、その城下町を形成していった要因の中に一つの文化の形成とい

うものが同時に行われてきていたということが言えると思います。

城下町を前田家がちゃんと成立させるためには何が必要であったかという、藩主がもちろんおられるわけですが、藩主の下に武家がおりますし、その周りを商人たちが取り巻いておられますし、その周りに農家がある。いわゆる士農工商という形になるわけですが、それが一つのまちの形成としてきちっと安定した状態であることが必要であったというふうになんか書物に書かれておりました。

その中で加賀藩がそういう城下町というものをきちっと成立させるためには何が必要だったのかということをおおきく言いますと2つあったと。

1つは何かというと、ちょうどこれは前田家できたときはまだ戦乱状態でしたので、城内に御細工所というのをつくったこと。その御細工所というのは何をしていたかということ、武具であったり武器であったり、そういうふうなものの補修であるし、新たなものをつくる――主に補修、管理ですね。そういうものをしていたと。特にその中で卯辰山工芸工房に残っているいろんな資料を見ますと、よろいとかそういうふうなものが結構その中の一つの業種の中にありまして、それが今、24業種という形になるわけですが、そういうものをつくったり補修したりすることをしながら、いろんな工芸的技術というものがそこで養われていたということが見えてきます。それはもちろん布もあり、漆もあり、金属もあり、革もあり、いろんな形のものがそこにありますけれども、そういうふうなものが総合的に技術というものが磨かれていったという過程があると。

それともう一つは、そこにいる武士たち。武士というのは結局その城下町を守る形になるわけですので、武士たちをいかに城主の配下というとおかしいですけども、いわゆるまちを守るためにきちっとした安定した関係を結んでおかないと、その時代ですのでいろんな形でいい人材がよそへ取られたりすることもあったりとか、禄が安かったらやっぱり禄を出すところへ行ったりとかそういうことも起こり得るし、力で武士をまずは押さえつけることも不可能な話だということ、前田の殿さんが考えた一つの方法は何かというと、彼らの心をつかまえることだということにおっしゃっておられたそうです。そのための一つの方法として、いわゆる趣味の共有化、例えばお茶もそうでしょうし、謡とかそういうのもそうでしょうし、能もそうかもしれませぬ。そのようにいわゆる茶道とかそういうふうなものを例えば中心とした、もう一つは能楽とか、いわゆる文芸というものを含めて、歴代藩主がずっと継続していったのは、そういう一つのものを形成していきながら、心と心のつながりというものを持つことによって人をまとめていくという政策をとりました。

そういうふうなものが次には市民、いわゆる城下に住む市民の人たちともいろんなつながりができて、例えばお茶一つとってみても4畳半とか3畳の茶室の中でされていたものから、野外に出て大名茶のように大きな茶道等が開かれて、人々

がそういうものを中心につながってくる。そうすると、そこで情報交換などが発生しますので、そういうことで加賀藩という一つのものが成立していく。それで城下町というものがうまく形成していったと。そういうふうなことが、調べたいろんな話を聞いてみますとそういうことがあったということですね。

そういう中で、いわゆる美術工芸というものが世の中に発達していく。以前は武器の修理とかそういうものがあつたわけですがけれども、徳川家のもとで世の中が平定されてきて平和になってきます。そうしますと、そういうものをするよりも、もっとこれからはものづくりの中に生活、城主の生活も含めてそういうふうなものをつくる必要もあるであろうし、それから参勤交代とかそういうことがございますので、そうするときには徳川家に持っていくいろいろなお土産もあるし、加賀から今現在で言う北陸新幹線の道を通して東京——江戸まで行くわけですから。その間にはいろいろな藩がございますので、そういうところのつき合いも含めて、いろいろな形の贈答とかそういうふうなものをつくられていく。

それは何を意味しているかという、お茶もそうなんですが、変なものをもらっても仕方がないし、あげても仕方がない。ですから、前田の殿が考えたことは、当代一のもの、よそには負けないものをつくらせる、つくる、それを差し上げるというふうに考えておられて、それが結局、御細工所の細工人とか、町の外にもそういう細工所——工房がございましたので、そういうところにもそれを求められたと。ですから、城内から求められるものにはそういうふうな一つの付加価値みたいものがございまして、それは技術的にもそうだし、時代というものを反映したやはり表現的にも非常に価値の高いものをつくるという精神というものが、これはある意味では御細工所も一つの気風というか精神というものをつくっていったものではないかなというふうに思いますし、そういうふうな技術というものが江戸時代が終わり明治に入るときに御細工所というのはなくなったわけですがけれども、そういう技術を持った方々が、明治の間からずっと職人さんが残っておられますので、その職人さんたちがいろいろな形で次に活動していくという場面が出てまいりまして、次はその職人さんたち、例えば金工、金属をやっていた人たちが、元前田藩ですと高岡の例えば銅器とかそういうふうなものにかかわってきているとか、それから中居でつくられていた前田藩のお金のもとにもなりました塩をつくる、製塩のための塩釜の技術者たちが今度は金沢に来て茶釜を例えばつくるようになった。例えば宮崎寒雉さんがそうかもしれませぬね。それで、そういう鉄工技術というもの、鉄の鋳物技術というものがあつまして、それと小松のほうで始まっていた絹織物というものが今度は非常に大きい産業に近くなってきて、それを完全に産業化するために、いわゆる織機というものが津田米次郎の力ででき上がってきたと。それでこれは短期間でありましたがけれども、金沢の今の湯涌のあの辺には絹の工場ができておりますし、そういうことと相まって、またそれで石川県というのは津田駒工業があるように世界の三大織機メーカーとし

て存在しているという、大きなそういう産業を生み出す一つの大もとになってきたのも、そういう一つの政策の中における工芸というものを中心とした技術とかそういうふうなものが今日まで継承されてきたと同時に、そういう人たちが温存されてきたということも、後の金沢の文化及び産業というものを生み出してきている一つの要因になってきているのではないかなというふうに思っております。

そして、それはいわんや市民生活に文化というものに対する質の高い生活というものをフォローアップしているということも言えますし、例えば哲学者を生み出したような精神性であったりとか、それから食文化とかそういうふうなものにもつながっていているというふうに考えております。

ですから、この金沢にとっての工芸というのは、よその地域からも比較してみますと非常に独自文化の結晶であるなというふうに思っておりますし、それが現在まで経済を支えて、そしてまちを発展させる原動力として捉えることができるのではないかなと。そのことから考えますと、いわゆるまちの中に、ちょっと工芸に特化しますけれども、工芸を基軸にしたものづくりの気風、簡単に言うと人づくりということになるわけですけど、ものづくりの気風を満たすということ。これが金沢の文化の次への時代に向かった醸造というものにつながるのではないかなというふうに考えております。

そろそろ10分です。最後に言いますけど、もう一つこれはちょっとおもしろい、金沢・現代会議というのが開かれておりますね、金沢の中では。そのときの第1回のときに私も、何回か行っているんですけども第1回のときに鈴木大拙館の名誉館長の岡村美穂子さんという方がおられますけれども、その方が鈴木大拙のお話をされている中でこういうお話をされていました。手仕事に始まるものづくりは、ほかにないものをつくり出す金沢の気風をつくった要因だ。金沢のものづくりは、その地域に文化性と精神性を醸造しているということを述べておられます。それは、ただ工芸という視点からのお話だけじゃなくて、いわゆる哲学として鈴木大拙がいろんな形で思考していた中で、やはりそういうふうなものを生み出す一つのもののスタートの中にそういうものづくりという一つの気風というのが、そういうふうなものも生み出してきたよということを述べておられるのではないかなというふうに私は解釈しましたので、最後の言葉としてそれを述べさせていただきます。

【喜多浩一文教消防常任委員長】

館長ありがとうございました。それでは続きまして、北山堂代表取締役の高橋様、お願いいたします。

【高橋洋一郎北山堂代表取締役】

私は、あんまりこういう講師とかこういうセミナーになれてなくて、先ほどの川本館長の話聞いて、ああ、なるほどな。金沢の伝統ってこういうふうになっているんだというのを改めて再認識させていただきました。

どちらかというと私のほうからは実際に工芸の現場で立っていて感じたことをちょっとお話しさせていただければなと思っております。

また、先ほど川本館長の話の中にもありましたけれども、実は九谷焼業界においてはこの卯辰山というのは本当は聖地でございます、1807年に青木木米という方が加賀藩が招致してきて、ちょっと下ったところに昔、工房をつくったというのが実は本当の九谷焼の始まりなんです。1655年に古九谷というのがあったんですが、実際はこれは幻の窯でございます、本当につくったかどうか、一、二年あった窯で、全国的に見れば古九谷というのはなくて古九谷様式というふうになっております。ですから、本当の九谷焼の歴史というのはこちらの青木木米がつくった春日山窯が古九谷の正式な歴史の始まりでもございますし、こんなところでこういうお話をする機会をいただきまして、本当に喜多委員、ありがとうございますということで、私のほう自己紹介させていただきたいと思っております。

それでは、プロフィールのほうへ行きます。私は1971年生まれでございます、俗に言う団塊ジュニア世代でございます。ちょうど大学卒業した後、バブルが崩壊してしましまして、本当はデパートとかそういうところで働きたかったんですが、結局、アイトーという陶器の流通問屋のほうに働かさせていただきました。東京のほうで日本橋高島屋だとか松坂屋さんなんかのデパート回りをして、そこで商品の注文とか受発注なんかをしておりました。3年ほど働いて実家の北山堂という会社に働かさせていただいております。

現在、私が5代目。明治期から始まっておる会社でございます私が5代目でございます、また協同組合加賀能登のれん会、全国で物産展を取り仕切っている会があるんですけども、その副理事長をさせていただいております。また、広坂振興会の商店街の会長というのもさせていただいております。後でこういったことで実際の活動内容なんかを皆さんに御説明できたらなと思っております。

それでは、具体的な話に参りたいと思っております。九谷焼流通について御説明いたします。九谷焼の流通というのは、基本的に一人の作家が全部つくるんじゃなくて分業制になっています。最初に山から土を掘ってくる製土所というのがあって、その後、製陶所で九谷焼の上絵をつける前の白いボディーをつくる場所があります。その後、上絵付という絵付師さんがおまして、それを産地問屋がその商品を全部取りまとめ、それを消費地問屋、私が働いていた会社がまさしくその消費地問屋に当たるんですが、それを各百貨店であったり小売店に卸したりいたしております。実際、私の今現在は産地問屋に近い形で、産地問屋がそのまま北山堂として金沢で販売しているような格好になります。

実は私どもの会社というか私どもの先祖というのはもともと加賀藩の武士でした。加賀藩の武士だったんですけども、廃藩置県というのが行われまして一気に職業を失ったわけなんです。半分の人が江戸に帰って、半分の人がそのまま残ったと。その残った人が私の先祖でございます、当時の政府が殖産興業育成と

ということで、九谷焼であったりとか金箔であったり仏壇、そういったものがつくられて、お城の周りに住んでいたように私は聞いております。当時は、ジャパネクタニという名前で世界各国に輸出されておりました、明治20年代の九谷焼は日本での輸出陶磁器第1位となるぐらいに上り詰めております。

ちょっと私はバブルぐらいの時の話になるんですけども、花瓶とかお皿なんかの記念品とか1,000個以上の注文というのは結構よくありました。私も帰ってから1回か2回、そういうぐらいの大量の注文というのをいただいたことがあります。ただ、実際そんなにすぐあるかといったらそんなことはなくて、それを問屋さんがいろんなところで在庫を持ち合うことによって商品を流通させております。そのバブル時代、私は聞いただけなんですけれども、本当に普通の美大生とか若手の作家でも10万円以上の花瓶というのが平気で取り扱われるようになっておりました。そういった時代ですので、本当に手づくりとか手描き、そういったものでは生産が全く追いつかなくて、実際は転写であったり型なんかがどんどん普及してきました。その結果、本当に下手な作家というのは全然つくれなくなってきたと言ったらおかしいですが、だんだん干されてきてまして、結局、タクシーの運転手をやったほうが全然収入があるわという、そういった時代背景がございました。

では、その結果ということで、現在、製土所と言われるところが1社のみになっております。これは小松にある谷口製土所というところになるんですけども、先日、北國新聞なんかにも出てましたが、何か有名な建築家を使って新しく建て直すみたいです。ただ、残念ながらそこ1社しかありません。

製陶所というのも現在4社か5社ぐらいあるんですかね。ただ、実質稼働しているのは宮吉製陶さんというところになるんですけども、そこで働いている人も現実には60歳前後の高齢者が数多く働いているところになります。

それをつくって絵付になるんですけども、実際は男性というより主婦など女性が非常に多くなっています。これは市場自体がやっぱり、買われるお客さんというのが女性がふえてきたからということも理由に挙げられます。

産地問屋なんかも激減しております。これは具体的に言うと能美市の寺井町、そこなんかが俗に言う産地問屋になるんですけども、実際は本当はかなり激減しております。

消費地問屋に至っては、陶磁器専門はゼロになりました。大抵のところは焼物以外に漆器とかガラス、いろんなものを組み合わせて百貨店に納めております。

じゃ、実際売る百貨店はといったら、ベテランの販売員がほとんど今はおりません。私がいたころは、まだ焼き物、食器売り場に勤めて20年、30年というそういうベテランの人ばかりがいたんですけども、今実際、百貨店に行ってもほとんどパートのおばちゃんとか、専門的な人はほとんどいなくなっているのが現状です。

そういったことを今、業界ということでお話しさせていただきます。

結局、一番の原因というのは、やっぱり一番言えることは住空間の変化ですね。床の間のある家が全くなくなりました。田舎のほうに行けばまだあることはあるんですけども、東京のマンションなんかには床の間なんかは絶対ありませんので、でっかいつぼとかそういうのは今全く需要がなくなっております。また、昔は進物ですね。私がアイトーに働いていたころは結婚の引き出物、60個、70個というのがざらによくあったんですけども、大抵今、結婚式をすると多分進物用のカタログが置いてあるというそういった時代ですし、自家需要というか、本当にお土産というのもなくなくなりまして、ちょっと自分用に湯飲みでも買って帰ろうかなというそういったことがあります。

つくっているほうから徒弟制度の崩壊というのが、結局、今までそういう一流の作家さんの下にはお弟子さん、学校を卒業した人が必ず働いていました。ただ、実際今、そういう一流の作家さん自体が食べれなくなっているんで、弟子なんかはまずほとんどとっておりません。ですから、そういった学校卒の職人さんがそのまま独立という格好が多いです。

また、その職人、作家さんたちが、結局、問屋さんありませんし自分たちで即売しなきゃいけない状態というのが今続いております。よくギャラリーとかでグループ展なんかが、特に言われるそういうやつですね。結局、販売業務まで全部自分でしなきゃいけないということなので、なかなか作家さんというのはつくることに専念できないのが今の現状です。多分、隣にいる秋友さんなんかはまさしくそんな感じじゃないかなと思っております。

業界を説明したことで、次に私が実際やっていることを御紹介したいと思えます。ちょうど先日終わったばかりなんですけれども、阪急うめだ本店というところで、私、物産展の実行委員長をしております。クラフト広坂さんに出展協力、石川県観光交流課、I S I C Oさんなんかにも御協力いただきまして、全体売り上げとしましてことは1億円を達成することができました。目標比119%で、そのうち工芸の売り上げというのは2,700万円ぐらい。ただ実際、これは本当は別会場で加賀の丸谷と伝統のところは別ブースでありまして、その売り上げが2,000万ぐらいあるので、大体半分半分ぐらいかなというのが実情でございます。

次のページで、なぜこんなに売り上げが伸びたか。ことし初めて丸谷焼ウルトラマンというのに御出展いただきました。これは丸谷の寺井の組合がやっていることなんですけれども、例えば福島武山さんのバルタン星人であったりとか、これなんかは12万9,000円。中田錦玉のウルトラマン10万8,000円とか、これが実際は飛ぶように売れておりまして、本当はこれも予約待ちで半年待ちというのがざらになっております。ただ実際問題なんですけれども、これ以外にも本当は若手作家のものがありまして、大体それが1万円前後のもので売られているんですけども、実際はそれは全く売れておりませんでした。かわりに売れているのは、

ここに載ってないんですけれども、1,000円で印刷した小皿があります。それは飛ぶように売れていました。結局、結論から言うと、一流の作家さんは売れているし、量産品は売れているけど、中途半端な作家さんはなかなか売れてないというのが実情でございます。

それ以外に、次のほうへ行きます。現代アートと金沢上生菓子のコラボをさせていただきました。これはルンパルンパさんって野々市のほうにあるギャラリーがあるんですけれども、その御協力をいただきまして、今、九谷焼業界で飛ぶように売れている牟田陽日さんだったりとか河端理恵子さんという若手の作家さんなんです。この人たちがデザインした上生菓子とお皿をつけて販売させていただきました。このお菓子なんかも目当てに結構数多くのお客さんが並びまして、森八さんの売り上げは前年比20%増ぐらいになっております。

次に、海外展開についてお話ししたいと思います。これは本当に金沢市さんのおかげでやらせていただいております。金沢市と台南市が観光交流協定を結んだことによって物産展をしていただけないかということで私がさせていただいております。ちょうど今、私、企画書を一生懸命書いておりまして、先ほども八田與一さんの生誕祭のほうに福光さんなんかともお会いさせていただきました。また5月6日、台湾のほうに行かせていただきたいと思っております。

台南以外にも、実際、アジアで一番売れている百貨店というのは実は台北にあります。太平洋SOGOというところになるんですけれども、そこで日本展というのが開催されておりまして、そこに金沢ブースとしてことし、そういった御縁のもと出展することができました。実際のところは台南にいるときにのんびりとしとったら、とある市長から、高橋君、これからは台北じゃなきゃだめ、台北だと言われて、えっ、台湾にいながら、私の昔お世話になった方に、じゃ、台北でやらせてくれということで実現しました。全体売り上げとしては、日本全体ですけど1億4,800万円、そのうち工芸というのは1,200万、日本円で大体4,500万円ぐらい、予算比でいうと200%。そのうち金沢の工芸というのは大体840万円ぐらいの売り上げを達成することができました。実際問題は、ここで売っていたのは銀器、100万円もするような銀器が飛ぶように売れておりまして、これだけの数字をつくることができました。

次に移りまして、一応その立役者である太平洋SOGOの副総経理の播本さんと呉さんが、ちょうど昨年、金沢に来られて市長を表敬訪問させていただきました。

次に、私の商店街としての活動でやっていることを御紹介したいと思います。

これは金沢学院大学の吉田先生という方がおられまして、その方と一緒に産学官連携ということで頑張らせていただいております。特にちょっと私が今注目しているのは九谷焼にプロジェクションマッピングをしております。プロジェクションマッピングというのは、今までやってきたお城にでかでかとライトアップし

たような、あれの小さいバージョンです。これというのは、本当に実際に九谷焼の大皿をつくりまして、それに対してプロジェクターで投影しております。これをすることによって、逆に見本といいますか商品をそのまま持っていかなくても、投影するだけで商品を見せることができるし、季節によって変えたりとか、それで実際に売れるんじゃないかなと思っております。これはまだまだ発展途上ですので、これから頑張っていきたいと思っております。

また次のページへ行っていただいて、まだこれからの話になりますけれども、工芸品のガチャガチャであったりとか、広坂くんというのが第四高等学校のキャラクターということで広坂でつくっておるんですけど、そういったことなんかも今取り組もうと思っております。

最後になりますが、私のほうから提言として、実を言うと私どもの商品というのは卯辰山工芸工房出身、美大とも現在はゼロです。大変残念なことなのですが。これは私の感じている原因としまして、優秀な卒業生のほとんどが金沢にいないように感じます。例えば、私、最近注目している作家で鍾 雯婷（ツォン・ウェンティン）さんという台湾から来た女の人がちょうど卯辰山工芸工房で働いて研修されて、いいなと思っていたんですが、彼女は現在、残念ながら東京芸大の博士課程か何かでどこかへ行かれて、金沢にはおりません。そういった方、優秀な方は多分輩出はしているんです。結構、どちらかというとい県外から来て、この学校に入って、また地元に戻るといいうそういった方が多いんじゃないかなと内心想っております。ただ実際、焼き物というのはいはり一流になるためには10年、20年というかなり時間がかかりますので、その間になかなかとり着かないで行かれたのかなと思っております。

それとやはり産学官の連携で金沢で就労することをあっせんするほうがいいんじゃないかなと思っております。実際うちに働いて、卒業制作展の案内がうちに来るかといったら、別に来ることもないですし、卯辰山工芸工房の人から何か声がかかって講師やってくれという話も実際はありません。そういったことで、いろいろ連携ができたらなと思っております。また、卒業後2年間というのを金沢に滞在することをそもそも入学条件にしてはどうかと思っております。

また、需要の開拓ということで、金沢市の記念品とかを逆にそういった卒業生なんかにつくってもらったらいんじゃないかなと思っております。先日、某トランプ大統領に何か記念品を贈られましたけれども、あれは実際、商品的には転写でつくった量産品になります。そういったものじゃなくて、ちゃんとした金沢の手づくりの逸品なんかをぜひ記念品として使っていただけたらなと思っております。またやはり商人にも補助金というのは、就労の確保をできたらお願いしたいなと思っております。作家さんには補助金出るけど、商人にはまず出ないので、そういった御協力いただければなと思っております。

最後になりますけれども、こういった金沢のアイデンティティを大切にしたい、

世界に通用する一流の職人・作家を育てるような環境づくりというのをぜひお願いしたいなと思っております。

【喜多浩一文教消防常任委員長】

ありがとうございました。次に、金工作家の秋友さん、お願いいたします。

【秋友美穂金工作家】

御紹介にあずかりました秋友でございます。よろしくお願いいたします。

私は、「金沢の文化の人づくりについて」というテーマをいただいたんですけれども、人をつくるというよりは、つくられてきたという立場からお話ししたいと思います。

プロフィールです。この機会にざっと自分自身でもプロフィールを洗ってみましてびっくりしたんですけれども、金沢の美術工芸大学を入学から数えてもうここ20年も私は、金沢の20年のものづくりの歴史とともに歩んできたんですね。それで、この間に築き上げてきたたくさんの友情に恵まれまして、あと先生にも恵まれまして、金沢市民の皆様を受け入れていただき、活動できたことを今は本当に実感して感謝している毎日です。

今、鈴見に小さな一軒家を借りまして、日々のものづくりに励んでおりますが、金工として主に銀のアクセサリーと銅の器などの制作をいたしております。

これからプロフィールと仕事の内容と絡めながら私のスライドをごらんくださいませ。金沢美大を出た後に、少し就職する機会もありまして、それは山梨の貴金属の工場のデザイナー、また制作の両方をやらせていただいたんですけれども、やはり作家をやりたいという気持ちと、会社勤めというものはちょっと違っていて、こちらは半年でやめまして、それから少しアルバイトをしてお金をためて、卯辰山の工芸工房に戻ってまいりました。そして、そこで3年間研修をした後、またそこでブランクがあるんですけれども、どうしても私はちょっと生き方としては不器用なんですけれども、手を動かすということしか能がなくて、アルバイトを続けながらアパートの一室でものづくりをずっと続けておりました。それで4年半ぐらいたったところで、この金澤町家職人工房東山の入所を募集しているということで応募させていただきまして、何組かの中から試験に合格しまして入所させていただいた次第でございます。

こちらは2010年から3年間入所して運営していましたが、制作実演とギャラリー、彫金教室、この三本立てで運営をしておりまして、ギャラリーは窓際のところに自分の作品を展示販売しました。こちらでよかったと思うのは、必ず自分でつくって自分で売った分は手取り100%なわけです。これはとてもすごくいい経験だなと思いました。

こちらは彫金教室をしていたんですけれども、銀のすり出し、やすりでちょっと形を成形しまして指輪をつくろうというそういう課題で、3人の皆さん、一番左は私なんで、ほかの生徒の皆さんにもつくっていただいたものを展示させてい

いただきました。3年間で入れかわりはありましたけれども、延べ11人のレギュラーメンバーに恵まれて、今でも私の活動を気にしてくれているすてきな方ばかりです。

先ほどの続きなんですけれども、制作実演というところでは、この町家自体は観光客ですとか市民の皆様を必ず受け入れるというのが条件でして、常に火床—金工の火を使う場所ですとか金床—たたいてものをつくる場所も常にオープンにしておりました。

また、地域交流も入所の条件だったんですけれども、これは私は当たり前だと思っていたんですけれども、町家のイベントですとか、あと町会の新年会ですとか地域のごみ当番、そういうことも生活をするように普通に参加していました。

あと、その町家イベントの中では特に東山は町家がとても多い地域なので、NPO法人の町家研究会さんが主催して、町家をめぐるイベントをやっていたんですけれども、そちらで毎年一度は体験を、ワークショップを開催するというものをしておりました。

こちらは銀のストラップ、銀の板に刻印を打ってストラップをつくるというものです。

それで、ちょっと話はそれるんですけれども、こちらは町家職人工房、昨年からは空きの状態になっておりまして、光熱水道費、あと電話代も込みで、また駐車場2台つきで東山のそんない条件のところはありませんから、そんな安さで自身の糧になる3年間を過ごせるということが、このかけがえのない工房に入所してくれる人を何とかまた探したいと思っているんですけど、こちらもよろしく願いいたします。

これは町家イベントの続きです。金沢J Cの金澤燈涼会ですね。今はもう名称が変わってしまっているんですけれども、こちらにも2年目から参加しておりました。これは自分の町家ではなくて、favori（ファヴォリ）さんという町家を使ったパン屋さんでの展示をやりました。

工芸協会の正会員でございまして、毎年3月に金沢市の工芸展のみならず、こちらは金沢市はユネスコのクラフトネットワーク都市ということで金沢市の工芸協会もクリエイティブワルツ事業をいただいております、私はアメリカのニューメキシコ州サンタフェに技術研修に行くことができました。こちらの研修では、サンタフェ市長表敬訪問で、毎年引き続き金沢市との交換留学の受け入れの関係をよくしてくれるようお願いしてきたことすとか、あとは美術交換ですね。私は金沢の伝統技法、加賀象嵌のうちの平象嵌という技法、あと日本の代表的な金工技法である毛彫りの実演と説明をしてまいりまして、またその道具も全部寄附してまいりました。そして自分自身は、あともう一つ自分の研究であります純銀のアクセサリーを寄附してまいりました。

また反対に、あちら側からアメリカンネーティブの技法、ちょっとマニアック

なんですけれども、凝灰岩を使ったトゥーフアキャストという、上のものなんですけれどもバングルです。腕輪です。鑄造の方法です。そして、左下のものはスタンピングという刻印によるベビーラトルです。ネーティブの間では赤ちゃんを寝かせつけるときにガラガラを使うんですけれども、そのベビーラトルでございます。

あとはトルコ石の研磨です。あとオーバーレイ技法という、それも金工のちょっとマニアックな技法があるんですけど、そのオーバーレイ技法を用いたペンダントヘッドをつくってまいりました。

あとはそれ以外にも世界遺産のタオス・プエブロの見学ですとか、ボランティア活動で地元の幼稚園での特別授業なども行いました。

あと、金沢のクラフトビジネス創造機構にもとてもお世話になっておまして、こちらは企画、運営、いろいろやっていただいているんですけれども、金沢の生活工芸金沢というプロジェクトです。こちらは2013年、2014年に2回にわたって代官山のTサイトガーデンギャラリーで行われました。伊藤忠ファッションシステムの川島蓉子……。

あと、これはその里帰り展です。めいてつ・エムザになります。

モノトヒトでも個展をやりまして、クラフト広坂での個展になりました。

そして今をときめく銀座の金沢で、また企画展をボックスギャラリーだけではなくてワークショップも開いて、こちらは満員御礼もいただきまして、銀座はさすがにマダム層の参加が多かったです。

あと、こちらも県のデザインセンターですとか、金沢市によるおしゃれメッセかなざわのくらふとマルシェ体験コーナーでございます。

あとイベントですとか市の活動以外にも、自分の金工としての作品がございまして、こちらは定番品でございます。

あと、制作の中でもいろいろ分かれているんですけれども、オーダーメイドの一点物も承っております。これもオーダーです。

特にブライダルですとか、あと男性のネクタイピンですとかカフスボタン、あとサイズがいろいろあるのでリング、あとちょっと変わったところでは宗教のアクセサリなんか結構需要がありまして、あともう一つ、看板です。これは銅を使ってつくっております。

これはお菓子の印影をつけるための型をつくるというそういうものです。

あとはオーダーではリメイクオーダーで、お母様の形見のリングをネックレスにですとか、そういった需要もふえております。

こちらは金具の制作です。特に革工芸、刺しゅう、水引、漆、ガラスなどの作家さんから依頼が多くあります。こちらガラスの作家さんからです。

あと器の制作としては、素材は銅をよく使っているんですけれども、Fusion21——金沢21世紀美術館の中のカフェで使っていただきました。これは今、銀座の

金沢のほうでも使っていただいております。

あと茶道具の制作ということで、こちらは建水です。

あと菓子切りですとか茶托です。

また、市の関係だけではもちろんなく、民間のグループ展などにも参加しております。こちらは全国的にものづくりが認められるようになったおかげなんですけれども、代官山の商店会によるクラフトイベントにも参加してまいりました。

あと12年ぐらい前から三越伊勢丹さんなんかでは催事イベントで個展形式で入っております。

一番新しいところでいいますと、こちらは横浜の三溪園なんですけれども、これも主催するのが全て作家であるとかバイヤーであるとかそういった人たちが集まって展示会をするものです。

済みません、長くなりました。私がいかに器用貧乏に作家生活を送ってきたかということをおわかりいただけたのではないのでしょうか。

高橋さんのお話でもあったんですけれども、やっぱりイベントをやるとその準備にも時間がかかり、出張に行くと交通費も宿泊費もかかりという経費の問題です。やっぱり若手の作家が育ちにくいというのはそういうところにもあると思いますし、そこで私も控えておまして、ちょっと落ちついてものをつくる段階に入っております。どんな形になるかはわかりませんが、マイブランドを立ち上げたいという自主制作の面でもうちょっと強化していきたいなと思っております。

最近、おしゃれなカフェギャラリーですとかクラフトショップもふえていますんですけれども、管理とか経理とか説明とかもできない。よいショップもありますけど、そうでないところもふえておまして、ちょっとそういうところでもう少し公的なショップがあるとうれしいなと思う次第でございます。

【喜多浩一文教消防常任委員長】

秋友さん、どうもありがとうございます。最後に、工芸作家の柳井さん、お待たせいたしました。よろしくお願ひします。

【柳井友一工芸作家】

よろしくお願ひします。柳井友一と申します。

ちょっと肩書には工芸家と書いてあるんですけれども、もともと金沢美術工芸大学を出まして、その後、日本ビクターというところでプロダクトデザイナーとして5年勤めていた経験があります。そこから、やはりちょっと世の中のものづくりというか、工業デザインのつくってはどんどん安売りされていくものづくりに先の限界を感じまして、そこで陶芸の道に入るわけなんですけれども、そこから多治見の意匠研究所を経まして卯辰山に入りまして、今、会社を立ち上げて、secca（雪花）という形での活動をしています。

今回、文化と人づくりというテーマなんですけれども、まだ超零細企業なんですけれども、工夫してきたことや仕組みづくりについて御紹介できればと思って

おります。

こちらがseccaというメーカーの名前になります。2015年に私出たんですけれども、その後に同じ経歴を持つ上町という人と2人でseccaというところを立ち上げました。

seccaというのは何をしているかといいますと、ものづくりに人生をかけたクリエイターが集まりまして、共に技とセンスを磨いて、新しい価値を世の中に提案していくというコンセプトでやっております。

私たちの一つの方針としまして、先端工芸御細工所とあるんですけれども、今の一番新しい技術を使って工芸でどういったものが表現できるのかというのをいろんな方とのかかわり合いの中でさまざまなスキルの開発をしています。特徴としましては、デジタルのテクノロジーと手仕事が掛け合わさったときにできるものというものをどんどん生み出しています。

ここからはちょっと具体的なものづくりの事例をさくっと御紹介したいんですけれども、こちらは3D-CADと言われる設計ソフトです。そういったものを使ってデザインした器になっています。これ、一見規則性がないように見えるんですけれども、全て重ねることができます。こういった機能性というのは、やはりデザインを基軸にしていることで生まれるものですし、またこういった特徴的な器というのはやっぱりプロの料理人さんに向けたものとしてすごい需要が少ないんですけれども、オリジナリティのあるものとして、ほかのものと違うものが欲しいという料理人さん、特に一流の方に多いので、そういったオーダーに応えられるような仕組みをつくってやっています。

こちらは新しい茶箱の提案ですとか、ほとんどしまうことが多い茶碗に、箱に新しい機能を持たせるものとか、こういったものも3Dプリンターでつくったりしています。

あとは最近ですと、東京のラーメン屋さんです。今、食の中でもかなりラーメンがブームなんですけれども、こういった新しい鉢の提案ですね。途中で味が変われる味変という機能をちょっとラーメン屋さんのオーダーで持たせたいということで、ちょっと一段、段々畑のようになっている形で、違う食材がそこに載せられるような構成になっています。

こちらは銭屋さんで今実際に使っていただいているんですけれども、季節の料理に応じて料理の前後でどういった一品を表現するかといったしつらえとか、そういったところも実際に料理人さんとかかわり合いの中で生まれてくる器というのを結構大事にしてつくっています。

こちらは3Dプリンターで出力したものに工芸処理を施したものなんですけれども、私自身は焼き物の専門ではあるんですが、前職がやっぱりデザイナーというところがありまして、器の用途に応じた材料選びというのは当然必要があると思うんですね。熱いものに磁器を使うと熱くて持てないと思うんですけれども、

そういったものも木製品できっちりとつくるということも、器という広いフォーマットの中で材料選びは徹底的にやるということをいろいろチャレンジしてやっています。

器以外にもアートピースということで森美術館の館長さんにちょっと招待していただきましてKENPOKU ART祭、こういったものにも今、アートピースの発表をさせていただいています。ことしですと、先日までやっていた世界工芸トリエンナーレの作品もこういった形で実際に私たちの工房でつくって、いろいろコンセプトを発表しています。

彼は、昨年、新メンバーに加わった北出という人物なんですけれども、彼は木工職人の専門家として、何をつくっているかといいますと、ハンドメイドのギターです。これは彼が直接手を施してつくった木象嵌で、ロゴマークの部分が貝の繊細な仕上げになっているんですけれども、全体としてはこういったSingularという形で純国産の材料を使ったギターをつくっています。これは実際に飛驒の飛驒木工さんで材料をそこへ探しに行きまして、圧縮杉という杉材なんです。それを300トンぐらいの圧力で半分以上に潰して強度を増した材料を使っています、こういったところも純国産の工芸の新しい形としてできないかというので検討しています。

伝統は革新の連続なりってよく言うのですけれども、新しい技術を使ってどこにもない工芸を生み出すというそういった開発する部分というのは実際、金沢にもなかなかないなというのを強く感じていまして、私たち自身はこういった公の場を与えていただければ、隠すことなくどんどん公開していきたいなというふうに思っています。

私たちは、やっぱり若い人は特にそうなんですけれども、師匠となる人を持っていませんので、独自で手法の開発とかも積極的に行っています。やっぱりそうなると思うと守るということよりも攻めの姿勢を常に持っていまして、技術は誰でも享受できるオープンなものになっていくべきだと。特にアメリカとかはそれが顕著に進んでいるところなんですけれども、これから勝負していくという部分では新しい文脈ですとかアイデアでどんどん形にしていくところが大事なのかなというふうに思っています。

個々の力を最大限に引き出す組織力ということで、私たちの今組織図をお見せしているんですけれども、今までの会社というのはやっぱりトップダウンで社長がいて専務がいて社員がいてという感じなんですけど、私たちのところはクリエイターがまず一番最初でいて、それを組織が下支えしているというような形になっています。それぞれの技術を持つクリエイターたちは自分の得意技がそれぞれあるわけです。石川県というのは特に全国まれに見る工芸王国だとは思いますが、その点、横のつながりで新しいものづくりが私たちはできるんじゃないかという唯一の場所だとも思っています。特にここの卯辰山とかはそのポテン

シャルをすごい秘めている場所だと思うんですけども、出てから、その関係性が割と希薄になっているなというのを強く感じていまして、すごいもったいないなというふうに感じています。ここで横展開でつながっていくと、そのメンバーでしかできない新しいものづくりができるんじゃないかというふうに思っています。

具体的に横のつながり、私は陶磁器専門で、先ほどの北出という人物がいたと思うんですけども、その2人で生み出した事例を、ちょっと動画なんですけど説明したいと思います。

これはことしのイート金沢というイベントがありまして、トロフィーの作成を頼まれました。そのときのメイキングになります。

〔動画を視聴〕

実際に顔を3Dスキャンして、それを画像のデータとして取り込みます。それを最先端のデジタルツールで加工しまして、それをNCとかを使って石膏を実際に削った後に、焼き物の機械で、こちらはボディーを、実際の木を削り出して加工しています。

これは型から外したところです。

実際に窯入れして、これは象嵌をしているところです。

こういったところも技術をお互いに共有しながら一つのものづくりをしていくというところは、やっぱり金沢ならではのんじゃないかなというふうに思っています。

石川県は特に職人さんが本当に近くに皆さんいらっしゃるので、そういう人たちの力が合わさるとかなりのことができるのに、今回ちょっとおもしろい事例になっちゃっているんですけども、こういったことも今コラボ作品として、大人が本当に悪ふざけで工芸をつくったらこうなるというような一つの事例です。

こちらは完成品で、顔をスキャンして取り込んで焼き物に置きかえたりとか、ボディーは直接切削でつくっていたりしています。

コラボレーションの事例としましては、既に京都とかがやっているんですけども、クリエイティブユニットのGO ON（ゴオン）というところです。茶筒の開化堂さんですとか西陣織の細尾さんですとか、最近ですとパナソニックと一緒に新しい家電の発表などをしていまして、順当な進化のあり方としてこういう工芸との違うマッチングの仕方というのも一つこの先あってもいいんじゃないかというふうに思っていて、ちょっと紹介させていただきました。

卯辰山にいたからこそ行政の手厚さに大変感謝しているんですけども、かかわる作家とかが、私たちも今後活動していけるようにいろいろと技術共有とかしながら一緒にものづくりをしているわけなんですけれども、単純に支援しているということではなくて、一緒に育っていきましようという形で本当にやっています。

工芸で飯が食えている人というのはほとんど、私の周りにも少ないんじゃないかな。やっぱりバイトしながらぎりぎりの生活をしていますし、文化の育成の前に、まず自分の生活を何とかしなきゃいけないみたいなことだと元も子もないなというのがありまして、ここでやっぱり大事なのは、先ほどの北山堂の高橋さんもおっしゃられていたと思うんですけど、やっぱりビジネスとしてちゃんと成り立つ部分、コーディネーターでしたりギャラリストの育成でしたり、そういった窓口、相談窓口が作家とかにもあるだけでも全然違うなというふうに思っています。それが行政ができない場合でしたら、民間がトライしていける関係づくりというのがあれば、今後、より発展していくんじゃないかなというふうに思います。

こちらは最後のスライドなんですけれども、ちょっと福光屋さんの松太郎さんにたまたまちょっと御相談する機会があったときに言われた言葉なんですけれども「若者 バカ者 よそ者が未来をつくる。」ということで、金沢でせっかくやっているんで金沢らしいものをつくろうと思っていたんですけども、あなたたちは金沢にいただけで十分金沢らしいんだから、そんなこと気にせずにやりなさいというふうな意見を聞きまして、金沢というのは結構よそ者を柔軟に受け入れてここまで発展してきた経緯があると思うんですけども、今後もそのDNAをもとに金沢の人とか文化も柔軟に変化していくんじゃないかというふうに思っております。

・市民とのテーマに関する意見交換

【喜多浩一文教消防常任委員長】

ありがとうございました。それでは、済みません。大分時間も押しています。

では、一人、二人になると思うんですけども、何か御意見、きょう来ている市民の方々に御意見等あれば、町会とお名前を言っていただいて、挙手の上でお尋ね願いたいと思います。よろしいでしょうか。

【参加者】

漆をやっております。今、所属は一応輪島塗で沈金というものをやっておりまして、今、ギャラリーをしながら活動しております。

この間、いろいろと金沢の伝統産業ということで職人さんのところを回ったりとか話を聞いたんですけども、本当にここ10年の間に職人さんがいなくなってしまうという危機感を覚えました。今、卯辰山とか伝統産業の継承とかと言われておりますけれども、実際に高橋さんも言われたとおり、産業の場にそういう人たちが全然入ってきてないというのが実際のところなんです。作家は多分いっぱいいらっしゃると思うんですけども、やはり工芸王国と言われている中で、そういう作家さんばかりで職人さんが全くいない。例えば作家さんやるにしても職人さんに塗ってもらうとか、そういうふうに頼んでいる割には、結局、職人さん頼りなんだけれども職人さんになる担い手をつくらない。ということは、自分たちの

首を絞めている、発展していかないという可能性がどんどん出てきているわけですね。

今本当に、この間、金箔を聞いたら全体で40人、金箔打ちをしている方が40人ぐらいだそうです。縁付をやっている方が20人。平均年齢が70歳。僕が話聞いた方は五十何歳ぐらいで、今、息子さんがやっていたら二十何歳がいらっしやるんですけど、20代は2人で、それ以上になるともう50代とか60代、70代、80代とかそういう状態です。

今後10年たつと多分上の方はいらっしやらなくなる可能性もありますし、それを今度99%、金箔は金沢だと言っている中で支えていかないといけないということは多分難しくなっていくのではないかなというのがありますので、やはり伝統産業の業界に人を送り込むようなシステムを何か考えていただかないと、本当に金沢の工芸というものがなくなる可能性が大きいと思います。

これは金沢だけではなくてほかの産地の話も一緒なんですけれども、本当に危機感を持ってやっていただきたいというのが僕の意見です。

【喜多浩一文教消防常任委員長】

貴重な御意見、本当ありがとうございました。

【参加者】

2年ほど前にこちらに引っ越してまいりました。それまで金沢がこんなに工芸が盛んだって、関東圏から来たんですけど全然知らなくて、もっと金沢がこんなに工芸に力を入れている卯辰山工芸工房があるとか、そういったことをもっと発信していけば、こういう素晴らしいところがあるんだというのをもっと知らせられるのかなと思うのが一つあります。

そして、先ほど卯辰山工芸工房を卒業した人は2年、何か住んだほうが良いという意見は確かにそうだと思うんですけども、ただ、金沢の外に出ていった人間も金沢のよさとかというのを多分広げていくというのも一つだろうと思うので、いろんな考え方があるというのが一つ。

そして、私、こちらに来て、非常に工芸作家さんがたくさんいて、工芸作家さんが非常に身近だということもすごく金沢のよさだなと思っていて、それは本当にここでないと味わえないことなので、そういったことももっと発信してよその人に知ってもらったほうがよいのかなと思います。

【川本敦久金沢卯辰山工芸工房館長】

一つだけ。

【喜多浩一文教消防常任委員長】

本当に短目でお願いします。

【川本敦久金沢卯辰山工芸工房館長】

きょうは目の前に文教関係の人がおられるということは、教育委員会など教育に力を入れるんですね。

先ほどものづくりの気風という話をしましたが、私ども随分前からいろいろ言っているんですけど、例えば教育の中で国語とか理科とか社会とかああいうふうなものは小学校入ってからずっとやりますよね。ところが、美術というのは週に一遍しかなくて、絵画とかそういうものしかない。これだけ工芸というものが例えば盛んでというふうに、気風があるとすると、もっとそういう工芸のものづくりというものを小学校のときから、例えば英語特区のように、金沢だからできるというそういう教育というものを小さいときから僕はしてもいいんじゃないかなというふうに常々思っておりますので、またそういうことも御検討してほしいと思います。

もちろん絵を描くこととかそういうものは表現するための基本で大事なことですけれども、工芸はそれにプラス材料というものがあるんですよね。材料をさわることによってほかの産業とかそういうふうなものにもつながっていきますので、ぜひそういうことをまたお願いしたいなと思います。

【喜多浩一文教消防常任委員長】

川本館長、最後にありがとうございます。

5. 閉 会

【小間井大祐文教消防常任副委員長】

それでは、閉会に当たりまして、金沢市議会、高岩副議長からお礼の御挨拶を申し上げます。

【高岩勝人副議長】

本日は、川本館長、高橋社長、そして秋友さんと柳井さん、ようこそこの意見交換会にお越しをいただきました。運営上、本当はもっと活発な意見交換ができればというふうに思っておりましたが、皆さんもまだまだ言い足りないことがあったろうと思いますけれども、貴重な御意見をたくさんいただきました。

川本館長の金沢市の文化というのは城下町の成立とともに醸成していったんだというような中で、先ほどおっしゃったものづくりの気風というのが大切なんだという興味深いお話をいただきました。

高橋さんは、このよい人材を流出させんためには産官学でしっかりと就労支援までしたほうがいい。また、世界に通用する作家さんを育成していく環境が必要ではないかと。この後、この卯辰山工芸工房がリニューアルしますので、ぜひともそういうような施設にしていかなければならないなというふうに思います。

秋友さんは、御自分の制作活動以外にも本市の工芸文化にも御尽力いただいておりますけれども、財政支援についても我々議会としてもしっかりと受けとめていきたいなというふうに思います。

最後に柳井さんは、先ほど川本さんは御細工所が技術を磨いたというお話をしておりましたけれども、ちょうど1400年の歴史を越えて先端工芸の御細工所だと

ということで、新しい形のクリエートユニットの形態において、伝統は革新の連続なりを地でいっているなというふうに思いました。

お二人の作家さんにはこれからもますますの御活躍を期待しているところであります。

また、市民の皆さんにおかれましても、本日は大変寒い中、遅い時間にもかかわらず来ていただきました。ありがとうございました。

これにて意見交換会を閉会いたしたいと思いますので、どうもありがとうございました。(拍手)

【小間井大祐文教消防常任副委員長】

それでは、意見交換会をこれで終わらせていただきます。皆さん、本当ありがとうございました。それと、アンケートがあると思いますので、ぜひとも御記入の上お帰りいただきたいと思います。帰り、気をつけてお帰りください。本当にありがとうございました。

以 上